

村の宝を世の中へ

今も昔も変わらぬ貴重な文化

安曇節守る高田さんの願い

安曇節は1923年(大正12年)から始まった。松川村だけの正調安曇節は1925年(大正14年)から。正調は「サー」がつくのが特徴。創始者は榛葉太生。今では約5万2千もの歌詞があり、無形文化財として登録されている。

松川村在住の高田尚武さん(78)は、歌を作る人がいなくなった時、安曇節を終わらせたくないという思いから一日一個、日記風に歌を書き続けている。思ったことを七七七五に表し、今では3460もの数の種類がある。高田さんの名刺に書いてある歌の一つに「サー よく来てくれた 松川村へ 水のうまさ 人のよさ チョコサイコロコイ」がある。「チョコサイコロコイ」はアイヌ語で「そうだそうだと感動だ」という意味を持つ。



松川村安曇節保存会 高田 尚武さん(78)



「心と体にしみわたる」大人会の練習風景

響岳太鼓は、村の商工会青年部の人たちが、「村おこしのために何かできないか」と考え、1986年から始められた。今年で26周年を迎える。最初は寄付集めから始まり、曲や練習場もなく当時の会長の屋根裏を借りて練習をしたり他の太鼓チームから色々なことを教えてもらっていた。しかし2回目の海外公演では、その国の人たちに受け

歴史深い響岳太鼓

アルプスに響け！郷土の太鼓

響岳太鼓は、村の商工会青年部の人たちが、「村おこしのために何かできないか」と考え、1986年から始められた。今年で26周年を迎える。最初は寄付集めから始まり、曲や練習場もなく当時の会長の屋根裏を借りて練習をしたり他の太鼓チームから色々なことを教えてもらっていた。しかし2回目の海外公演では、その国の人たちに受け

の子供達は踊りは踊れるが、歌が歌えない子が多い。安曇節は村の宝なので、世の中に広めてほしい」と思っている。高田さんは「今の子供達は踊りは踊れるが、歌が歌えない子が多い。安曇節は村の宝なので、世の中に広めてほしい」と思っている。

正調安曇節

サー

寄れや寄ってこい
安曇の踊り

田から町から
野山から 野山から
チョコサイコロコイ

という願いを伝えてくれた。

松川の方言を使い会話形式にしてみました



- ① A: とっさ！ 隣のがきがどぶすになった。
(父さん！隣の男の子が病気で床についたってよ)
B: そうかい、それはもーらしいな。
(そうか、それは気の毒だな)

- ② A: やい、まだかかさじょぜーるなのか？
(おまえ、まだ母さんに甘えてんのか？)
B: うんにや、びしょってねえ、おめえに言われたくねえ。
(いや、意気地なしのおまえに言われたくない。)

- ③ A: なんだかもぞっかいなあ。
(なんだか体がかゆいなあ。)
B: がった坊主がへっぶり虫で遊んでえれえ目にあった。
(いたずら坊主がカメムシがで遊んでえらめにあった。)

- ④ A: ひげたで焼いた「いよ」がきなくせえな。
(いろりで焼いた魚が焦げ臭いな。)
B: そりゃ、たまげた。
おしょうしいことしたな。
(それは驚いた！もったいないことをしたね。)



方言使ってユニーク会話

物語に込められた思い

松川村の民話について湯口康章さんが話してくれました。多くは松川に住んでいる人達が参加している「村おこしこぶし会」という会があり、村の民話を伝えている。民話は松川村に住んでいた人達が子供達に話をしたことがそのまま残って民話となった。昔は田んぼにそれぞれ名前がついていたが、今はなくなってしまうそうだ。民話というのは、「たみ」が作った創作民話になって今も残っている。ここで一つの物語を紹介しよう。



『牛首』
昔あしむかし、松川村と西山村では、「乳川が村の境だ。」
「いや、大洞(おおぼら)山の尾根が境だ。」などと言いあらそって、どっちも後ろへは引かなかつたそうだが、ある時、芝草刈りに行ってた両方の若い衆が、鎌を振りかざしての乱闘さわぎとなってしまう。このままにしておくと、時刻を決めて双方から山へ登って、パッタリ行きあつたところを境と決めよう」ということになり、血気さかんな松川村の庄屋さまは、「村境は乳川の淵にしてみせるぞ。」と、馬で一氣に大洞山を駆け上がり、「あそこまで来ればもうしめたものだわい。」とどつと峠をふり仰いでみる。と、あれ、木の間から牛がにゅっとう首を出している……そうして年老いた西山村の庄屋さまが、白いひげを、なでてニコニコ笑っているではないか……。それから両方の境は、ここということになり、「牛首」と言われるようになったそう。

※松川村の庄屋さま・西山村の庄屋さま